

## 全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■ 第1章「3・11」

②

# 制御室に響く警報音

ファン、ファン、ファン、ファン

。東日本大震災の地震の揺れが収まらない東京電力福島第1原発

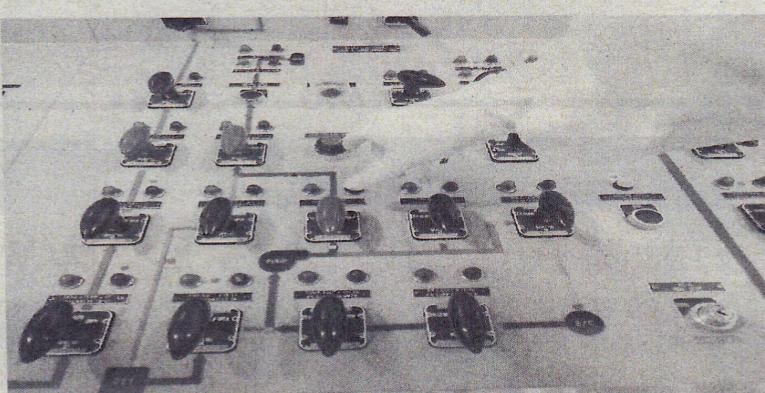
1、2号機の中央制御室はけたましい警報音に包まれていた。さらに大きな音で火災警報も「ジリジリシリジリ」と鳴っていた。

作業管理グループの大野光幸(51)

が制御室に駆け込んできた。地震で原子炉はスクラム(緊急停止)したが、外部送電網からの電力が途絶えたため、非常用ディーゼル発電機(DG)が起動していた。

大野は「通常のスクラムでしたか

ら、この時までは自分も周囲の同僚



大野が地震後に起動させた、福島第1原発1、2号機中央制御室の2号機冷却装置「RCIC」の操作盤=2月

も落ち着いていました」と振り返る。

原子炉やタービン、発電機の運転状況を監視する制御室は、1、2号機の原子炉建屋に挟まれる形でコン

トロール建屋2階に位置する。約7

50平方㍍の室内には、中央の当直長席から見て右に1号機、左に2号機の制御盤がある。

当直は通常、当直長、副長、主任

A～Eの5班が24時間交代で詰める。地震発生時は研修生らを加えたD班の14人がいた。

大野は近隣の小高町(南相馬市)出身で、かつてこの制御室で副長まで

務めた。今は運転員たちの作業が適切に管理する立場になっていたが、緊急時にはこうして当直のサポートに回る。同じ2階の執務室から約20メートルの廊下を走って駆けつけたのだ。いれば再び鳴るはずだ。仕組みで、大野はそのことに注意しながら起動を押していた。本当に

大野は制御室入り口から見て奥に

ある2号機の制御盤に駆け寄り、原

子炉隔離時冷却系(RCIC)とい

う冷却装置の操作に取りかかった。

核燃料冷却が最優先だった。

「RCIC起動しました」。大野

は、原子炉の状態を記録している副長に向かって報告した。RCICは

原子炉から出る蒸気でポンプを回し、炉内に冷却水を送り込んで燃料

を冷やす装置だ。

大野による最初のRCIC起動は

地震発生からわずか4分後の3月11

日午後2時50分だった。RCICは

(敬称略。年齢、肩

たたましかった警報音になつた。

1、2号機は全電

通信 国分伸矢)